

# 「環境」をめぐる建築的問題の所在とその変遷に関する一考察

## 1970年から1979年までの『新建築』誌巻頭論文の考察を通じて

212-145 峰松 宏気

### 1. 研究の背景と目的

1960年代の日本は、諸外国にも類例がないほどの急激な経済的發展を成し遂げる。一方で、高度経済成長は、全国的な規模において公害問題を生み出すこととなる。高度経済成長によって工業化や都市化が進み、大気汚染や水質汚濁、さらには自然破壊なども深刻化していった。これらの問題に対応するために1967年には「公害対策基本法」が施行され、1971年には環境庁（現・環境省）が発足している。このような状況下、公害対策の必要性は民間企業にも浸透していくこととなる。また1973年と1979年に起こった石油ショックによって省資源・省エネルギーへの取り組みが進む一方で、都市・生活型の大気汚染が広がり、自動車の排出ガス規制などがなされることとなった。そして、1980年代半ば以降は、地球温暖化や生物多様性の衰退を受け、環境問題は世界共通の課題となった。

『広辞苑』によれば「環境」とは、「めぐり囲む区域」「特に、人間または生物をとりまき、それと相互作用を及ぼし合うものとして見た外界」を意味するが、上述のように建築や都市をめぐる問題において「環境」はいくつもの意味において用いられてきた。言い換えるなら、これらの「環境」の意味を探ることで、それぞれの時代の建築的問題の一側面が浮き彫りになるとも言えよう。本研究では、環境問題への対応が自覚された時代とも言える1970年代における「環境」という言葉の意味の変容の考察を通じて、「環境」をめぐる建築的問題の所在とその変遷を明らかとすることを目的としている。

### 2. 既往研究

「環境」という言葉の意味・定義の変容についての研究は、管見の限り確認できなかった。

ただし、粕井による「建築設備技術の社会的要求に関する考察」<sup>1)</sup>は、「環境」という言葉そのものに関する考察ではないものの、「建築設備技術と社会的要請」の関係を技術的に解明することを試みたものであり、「環境」をめぐる建築的問題の変遷の一端を明らかとしている。

また、本研究では、「環境」という言葉の意味・定義の変容を考察するため、建築家等の言説を考察対象とするが、言説研究についてはいくつかの先行研究を確認することができた。北川らの一連の研究<sup>2)</sup>は、建築物の言語描写を考察対象としている。例えば、論文「建築の言語描写における消去の表現からみる建築の反在性」<sup>3)</sup>では、建築専門雑誌『新建築』（新建築社）から「消去」に関する記述をキーコンテキストとして抜き出した上で、それらの記述を分類・整理し、クロス集計を行った後、コレスポンデ

ンス分析が行われている。分析の結果得られた散布図から記述内容の相関について考察がなされ、「消去」の表現を通じた建築の反在性が明らかとされている。

また山田らによっても建築家の言説を考察対象とした研究が行われている<sup>4)</sup>。論文「建築家の言説にみられる現代住宅の空間モデル」は、住宅をめぐる建築家が建築の実態をどのように思考し、構想してきたかを、建築家が著した言説から分析した研究である。『新建築』誌に掲載された建築家自身の作品解説を対象として、彼らによる空間に関する記述を抽出し、それらをKJ法に基づいて分類整理した上で、分析が試みられている。

本研究では、上述の研究の分析方法を参考に「環境」に関する記述の分析を進めることとした。

### 3. 論文の構成と研究方法

本研究では、1970年代の「環境」という言葉の意味の変容の考察を行う上で、まずは第一章で、予備的考察として1970年から1979年までの「環境」に関わる出来事並びに問題について把握・考察することを試みた。なお、「環境」に関わる出来事の整理・把握を行う上で、環境省が発行している『環境白書』<sup>5)</sup>を主たる資料とした。

第二章では、『新建築』誌の巻頭論文（1970年1月号～1979年12月号）において使用された「環境」という語の意味の変容について分析を行った。『新建築』誌は、年代に偏りがなく、かつ現代まで継続的に発行を続けていることから本研究の研究対象（資料）として妥当性を有すると判断した。研究にあたっては、1970年1月から1979年12月までに発行された同誌の巻頭論文において「環境」という言葉が使われている文をキーコンテキストとして抽出し、その意味内容を把握した上で、そこに用いられている「環境」という言葉の意味を分類1（大分類：「環境」の意味を大まかに捉える）及び分類2（小分類：「環境」の意味をより詳細な意味で捉える）に区分した。そしてその上で、その時代的推移・変容について考察した（表1）。さらに考察にあたっては、KJ法を用いて「環境」という言葉の意味の相関性について分析を行った。

表1 キーコンテキストと「環境」の意味分類表（例）

高層マンションは、本末市街地の共同住宅として重要な課題であり、また高層化は、都市環境の整備のために必要な方途であるにもかかわらず、最近では多くの場合、日照権その他の問題で住民の反対にあい、なかには首都周辺の2,3の都市に見られるように、マンションの建設を規制するところも出ているありさまである。	建築家が公害の加害者の一員になって高層建築がそのいい例である	都市環境	非人間的な都市	武基礎「地域社会と建築家」：『新建築』新建築社、1972年10月号、p.159
---	--------------------------------	------	---------	---

#### 4. 考察結果

本研究の資料とした1970年1月号から1979年12月号までの『新建築』誌の巻頭論文において、「環境」という語が用いられていた論文は72編確認できた。

72編の論文から抽出できたキーコンテキストは532文であった。532文の内、約65%が70年代前半に確認できた。

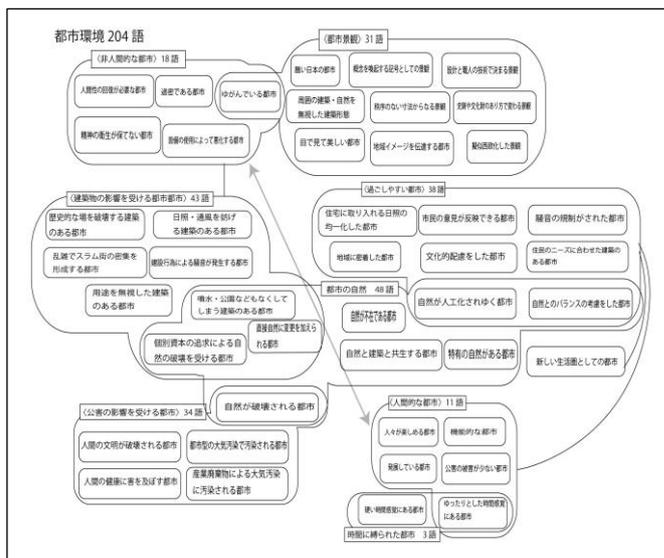
532文のキーコンテキストで用いられていた「環境」という語は、その意味において以下の四つに大別された。

- ① 都市環境：人・建築およびインフラで構成される場及びその状況
- ② 自然環境：人や生物を取り囲む、水・樹木などがあるままである状態で構成される場
- ③ 住環境：人間の住まいと密接な関係にある場及びその状況
- ④ 室内環境：人間が活動する内部空間

「都市環境」に該当した語が204語と最も多く、「住環境」(141語)「室内環境」(113語)が続き、「自然環境」(62語)は、「都市環境」の3割にも満たなかった<sup>6)</sup>。これら4つのカテゴリー毎にKJ法によって分析を試みた(表2)。その上で、それらを総合的に考察し、「環境」という語の意味の相関性について考究した。

本論において抽出できた「環境」という語は、全体的には、人間にとって悪影響を及ぼし得る状況という文脈、つまりは、ネガティブな意味合いにおいて用いられていたことを確認することができた。特に、先の4つのカテゴリーの中でも、「都市環境」と「自然環境」に分類された語においてその傾向は強く見られた。70年代前半において、公害による自然破壊、建設行為による騒音問題、高層建築による日照問題といった問題が社会問題化していたことが、その背景として挙げられると考える。また、「室内環境」に分類された語もまた、その周囲のネガティブな「環境」と呼応するように、通風や採光に問題を有する、閉じた空間としての意味合いを色濃く示していた。さらに「自然環境」に分類できた語は、70年代後半にはその該当例が少なくなっているが、それは、当時公害対策がある程度進んだことに起因しているのではないかと考えられる。一方で、70年代後半には、建築の「外部」としての「都市環境」や「自然環境」から、人間中心の快適な「住環境」の形成へと、建築家の意識が向けられていったことが本論の考察により明らかとなった。すなわち建築家たちは、人間が対峙しなければならない「環境」として「都市環境」や「自然環境」を捉えていた段階から、改善された「環境」としての「都市環境」や「自然環境」との適切な関係において如何にして良好な「住環境」を構築するかに腐心し始めたのであった。このことは、70年代後半になると、「都市環境」に分類された語についても、人間の過ごしやすいつieldとしての「環境＝都市」という文脈において用いられるようになるという事実とも関連づけられると考える。

表2 「都市環境」に該当した語のKJ法による分析結果



以上のことから、70年代において「環境」という語は、人間が対峙すべき、批判の対象としてのネガティブな状況から、自ら構築、獲得すべき目標としての良好な場へとその意味合いを変質させていったことが明らかとなった。

#### 5. 今後の課題

本研究では、その対象期間が1970年からの10年間に留まった。今や環境問題が世界共通の課題となっていることを考えても、1980年以降についてもその対象を拡張する必要がある。その上でこそ、本研究で考察を試みた70年代の「環境」の意味、並びにその変遷はより正しく補足可能となると考えられるが、この点については今後の課題としたい。

#### ■注

- 1) 柏井滋道：「建築設備技術の社会的要求に関する考察—空気調和衛生工学会誌特集を題材として—」, 2016年度大阪工業大学工学部建築学科卒業論文。
- 2) 北川啓介・内藤拓也・寺田享平：「建築物の言語描写における光の多義性」, 『日本建築学会計画系論文集』, 第680号, 2012年10月, pp. 2345-2353. 北川啓介・米澤隆・大井亮：「建築物の言語描写における透明性の多義性」, 『日本建築学会計画系論文集』, 第686号, 2013年4月, pp. 791-799. 北川啓介・早川綾・田原聖・佐藤菜生：「建築物の言語描写における〈規模〉の多態性 1950～2011年の『新建築』誌を対象として」, 『日本建築学会計画系論文集』, 第740号, 2017年10月, pp. 2565-2575.
- 3) 北川啓介・上間鉄平・加藤正都：「建築の言語描写における消去の表現からみる建築の反在性」, 『日本建築学会計画系論文集』, 第736号, 2017年10月, pp. 1435-1443.
- 4) 山田深・奥山信一・坂本一成：「建築家の言説にみられる現代住宅の空間モデル—建築家の創作論に関する研究—」, 『日本建築学会計画系論文集』, 第456号, 1994年2月, pp. 123-134. 山田深・佐々木夕介：「現代日本住宅の創作における与条件と建築の関係イメージ—建築家の言説にみられる空間的思考に関する研究—」, 『日本建築学会計画系論文集』, 第608号, 2006年10月, pp. 173-179.
- 5) 1972年以降、環境庁が発行している(2001年以降は環境省発行)前年度の自然環境の状況と本年度の環境保全に関する施策がまとめられた調査報告書。
- 6) 残りの12語については、4つのどの部類にもあてはまらなかった。

#### ■参考文献

- 1) レイナー・バンハム：『環境としての建築』, 堀江悟郎訳, 鹿島出版会, 1969年。
- 2) ジェイ・A・パルマー：『環境の思想家たち(上・下)』, 須藤自由児訳, みすず書房, 2004年。
- 3) ロベール・ドロール他：『環境の歴史 ヨーロッパ、原始から現代まで』, 桃木暁子他訳, みすず書房, 2007年。

(本田研究室)